

主の昇天
マタイ 28・16-20

2014.6.1 9:30 ミサ
柴田 潔(イエズス会司祭)

導入

今日は、主の昇天を祝います。苦しんで亡くなられたすべての人が天の国に迎えられるように願ってミサを始めましょう。

説教

今日は、ミサの後に予定されている信者講座と関係づけてお話しします。私たちは、死んだら天国に入る、神の国に入ると信じています。でも、「実際はどうなんだろう？」と考えさせられることがあります。私は、山口で合計 8 回、若い人たちを被災地のボランティアに引率していて、事前準備に観ている映画があります。『遺体 明日への 10 日間』という映画です。津波に襲われた釜石で、使われなくなった学校の体育館が遺体の安置所になっていました。次々とご遺体が運ばれて混乱しているところに、昔火葬場で働いていた人（西田俊行扮する）がボランティアを名乗り出ます。彼は亡くなった方が少しでも安らぐように、ご遺族の動揺を抑えるように職員を指導します。ご遺体の中でも痛ましいのは、子どもが寝かせられた小さな棺です。しかも、家族が迎えに来ない棺もあります。もう火葬場に送られる時が近づく時に、ボランティアさんはこう声をかけます。「まだ、お父さんとお母さん、迎えに来ないけどねえ…もう少しの辛抱だからね」。小さな棺をさすりながら声をかけます。他の身元の引き取り手のない棺ひとつひとつに「もう少しの辛抱だからね」と声をかけて回ります。もし、彼が声をかけなかったら・・・どれだけ寂しかったか？ 迎えに行けない家族はどんな気持ちなのか？ もし、私がその場に居合わせても、もう悲しくて、どうしていいか分からなくなっていた・・・。

第一朗読の中では「天に上げられたイエスは、またおいでになる。また、会える」、とあります。でも、お父さん・お母さんの迎えがなかった子どもが天の国で家族と会えたのか？ 私には、「会えます」とはっきり言えません。「ずっと、離れ離れでないように！ 今は、魂が安らいでいますように！」と祈ることしかできません。私たちは、聖書に書かれていることが、簡単には実現しないことを時々考える必要があるでしょう。

「もう少しの辛抱だからね」。もしその場に居合わせても、私にはそのような言葉をかけることはできなかつたでしょう。でも、探せば、できることは見つかります。信者講座で詳しくまたお話ししますが、幼稚園のバザーで販売するカブトムシを4日間で100匹つかまえたり、ボランティアに行くために、ツアーコンダクターのような仕事（宿泊先の手配・チケットの手配）をしたり、行き帰りは修学旅行の引率みたいなことをしたり、当然、現地でミサもしますが、いくつもの仕事を掛け持ちます。被災地の方に少しでも喜んでもらえたらと思って、フグ雑炊やういろろを作ったりしました。高校生のアイデアで「音楽で励まそう」ということで、リコーダーをみんなで吹いたこともあります。AKB48の「会いたかった」なんですけど・・・皆さん聴かれますか？では、自信はないですが・・・

私が音楽得意じゃないことは皆さんご存じだと思います。得意でなくても、被災地のために何かできないか？と思って練習して演奏しました。でも、皆さんのように暖かく見てくださる方ばかりではありません。イエズス会では年に一度、長上との面接があるのですが、「柴田さんは、被災地にばかり行ってる、と聞きましたが、実際どうですか？」と聞かれました。要は、告げ口（勘違い？）している会員がいるようなのです。長上は、「いろいろ言う人がいるからうまくやりなさい」と言われましたが、何か一生懸命になるとそれを咎める人（けん制する人）が残念ながらいます。福音にも「しかし、疑う者もいた」、とあります。「被災地の方を励ましたい」と思って頑張っても、良くは思わない人が現実にはいます。でも、がっかりする必要もありません。イエスに近かった弟子たちでさえ疑ったのですから・・・今、被災地を応援するのを良く思わない人がいてもおかしいことではありません。大事なのはめげないことです。「神さまが、共にいてくださる。苦しい人のそばにいてくださることを伝えることです。そのためなら、何だってする。そういう、割りきりというか覚悟が私たちには必要で、今のリコーダーも上手く吹けるか分からない中での挑戦でした。

ボランティアさんは「もう少しの辛抱だからね」、とご遺体に優しく声をかけました。私たちも「何かできるんじゃないか？」って考えて実行することができます。聖霊が働いてくださいます。苦しんで亡くなられた方が天の国に入れるように。また、神さまが共にいてくださることを証できるよう願ってミサを続けましょう。